

社会的インパクト評価イニシアチブ 第五回全体会合

日時：平成 29 年 7 月 29 日(金) 10:00-12:00 場所：日本財団ビル 2F

◆ 議事次第

1. 初参加メンバー自己紹介
2. 各ワーキンググループのアクションプランの報告
 - (1) インパクト志向原則作成 WG
 - (2) アウトカム・指標作成 WG
 - (3) 資金提供者ネットワーク WG
 - (4) 社会的認知 WG
 - (5) 人材育成 WG
 - (6) ガイドライン作成 WG
 - (7) 事例蓄積・活用 WG
3. 社会的認知 WG からの提案とお願い
4. 各アクションプランについての意見交換
5. インパクト志向原則ワークショップ

◆ 議事録

1. 初参加メンバー自己紹介

事務局より冒頭あいさつが行われ、初参加者からご挨拶を頂いた。

—初参加者の方々からご挨拶

- 独立行政法人国際協力機構 野田氏
- 一般財団法人非営利組織評価センター 平林氏
- 琉球大学 宮里氏
- 株式会社資生堂 加藤氏
- 一般社団法人 Earth Company 滝澤氏・玉手氏
- 静岡県立大学 津富氏
- 社会的投資推進財団 菅野氏
- 特定非営利活動法人北海道 NPO サポートセンター 高山氏
- 公益社団法人日本サードセクター経営者協会 中川氏

2. 各ワーキンググループのアクションプランの報告

6月29日に開催した Social Impact Day 2017 の報告及び本イニシアチブのロードマ

ップの全体像の紹介後、ロードマップを実現させるための各ワーキンググループ（WG）のリーダーが、配布資料をもとに各々のアクションプランについての報告を行った。（詳細は配布資料参照）

(1)インパクト志向原則作成 WG 鴨崎氏（日本ファンドレイジング協会）

ポイントは様々なステークホルダーで様々なインパクト志向のあり方が考えられること。それらはどんなものかまだ分からないため、これから言語化していきたい。

(2)アウトカム・指標作成 WG 鴨崎氏（日本ファンドレイジング協会）

このWGは「グローバル・ステアリング・グループ（GSG）」という、社会的インパクト投資推進のためのネットワークの国内諮問委員会を中心に進めており、社会的インパクト評価ツールセットの開発を行っている。注意が必要なのはこのツールセットが決定版ということではないこと。各団体が評価を始めていく時に、ゼロから始めるよりも手がかかりがあった方が始めやすいだろうというものである。各団体の事業に合わせてロジックモデルや指標を変更してもらうことを想定している。

現在までに5分野を開発・公開しており、今年度は新たに3分野の開発を予定。こんな分野があると助かるといった声や、実は作り始めているものがあるといった話があれば、ぜひご連絡頂きたい。

(3)資金提供者ネットワーク WG 加藤氏（トヨタ財団）

隔月ペースで事例共有会を開催し、毎回2事例程度を共有しながら進めていきたい。資金提供者の方でWGにご参加希望の方はご連絡頂きたい。

(4)社会的認知 WG 金子氏（マカイラ株式会社）

本WGが2017年度に目指す「日本における『社会的インパクトを求める』空気感の醸成」、これは「社会的インパクト評価」ではなく「社会的インパクト」を求めるとしていることがポイントである。評価というと一般市民の人たちにとっては自分とのつながりが無くなってしまいが、社会的インパクトだと「社会に良いことだね」と日常生活の中での想像もできるからだ。

広く社会の人たちに、社会にインパクトがあることをやることは良いことなのだという認識を持って頂き、かつ、自分が作り出したインパクトについてはしっかり把握して周囲に伝えていく、そういったことは良いことだという雰囲気社会に出来上がっている状態を目指したい。

みなさまにご協力頂きたいのは、事例や、やってきて困難だった点などをご紹介頂くこと。それらを取材・記事などにつなげていきたい。

(5)人材育成 WG 加藤氏 (トヨタ財団)

本 WG は人材育成に関わっている人だけでなく、資金提供者、事業者、専門家など多様なステークホルダーがメンバーとなって進めている。参加したい方や、評価研修等に関する情報を提供できる方はぜひご連絡頂きたい。

(6)ガイドライン作成 WG 今田氏 (CSO ネットワーク/日本 NPO センター)

まだメンバーも鋭意募集中で、特に評価の高い専門性を持つ方を募集している。これまでの2回のミーティングでは問題の整理を行った。「社会的インパクト評価」という用語の問題やインパクト志向原則との関係性が議論になっている。

(7)事例蓄積・活用 WG 落合氏 (ケイスリー株式会社)

本 WG はボトムアップで事例を積み上げながら考えていこうというアプローチをとっている。事例収集を行う上での人手が足りなく、様々な事例を知る良い機会にもなるので、ぜひみなさまにもご協力頂きたい。

3. 社会的認知 WG からの提案とお願い

①ロードマップの一部変更

配布資料 (社会的認知 WG) の2スライド目に示したようにロードマップを変更したい。アクション内容は変わっていないが、より分かりやすくするために対象とアクションを分けて書き直した。「変えるならこう変えた方が良い」「変えない方が良い」などのご意見があれば頂きたい。

②メディアの紹介

自社のメディアやお付き合いのあるメディアなどがあればご紹介頂きたい。

4. 各アクションプランについての意見交換

(提案) 評価に関する知見を有する国際協力 NGO センター (JANIC) も巻き込んではどうか。

(返答) JANIC には当初からお声がけしている。まだ検討して頂いているところだが、改めてご案内したい。

(質問) 社会的認知 WG の目標に「社会的インパクト評価・インパクトサイクルに基づく事業運営が事業者の信頼性と結びつくようになっている」とあるが、具体的にはどのような物差しを想定しているのか。その信頼性はどのように計測していくのか。

(回答) それを含めてこれから WG で検討していきたい。

(提案) 「認知度が1割を超える」ということを目指しているのであれば、動画や漫画なども活用してみてはどうか。

(返答) 誰にでも分かってもらえるということがすごく大切なので、そういった方法も検討してより広く伝えていきたい。

(提案) 日本サードセクター経営者協会 (JACEVO) には、ツリー型ロジックモデルの事例が 200 事例ほどあるので、整理を進め、紹介していきたい。また、ロジックモデルの作成支援者も育てているところだ。

(返答) 事例蓄積・活用 WG、人材育成 WG と連携できると思う。

(質問) 各 WG のメンバー構成バランスについてどのように考えているか。NPO や課題解決当事者の割合が少ないように感じる。

(回答) 評価を实践して頂く事業者の方の参加をもっと多くしていきたい。事業者の方に意義を感じて頂けるような活動にしていくことが課題。

(質問) インパクト志向原則とガイドラインとの関係性は？

(回答) 「この要件、この項目が出来ていればいいよね」というレベルでないとガイドラインにはならない。なんでもかんでも社会的インパクト評価と呼ばれてしまうことへの懸念もあるので、必要な要件を揃えられればと考えている。ガイドラインの内容としてはそういったことを考えている。

(提案) 子どもの頃の体験は大きな影響となる。子どもも人材育成の対象に含まれるのか？

(返答) 人材育成 WG では子どもは対象に入れていなかったが、社会的認知 WG の方では学校現場への普及なども目指す状態として検討されている。

5. インパクト志向原則ワークショップ

インパクト志向原則の内容について検討するために、事業者、資金提供者、中間支援

の3つのグループに分かれ、以下2つの質問についてのディスカッションと全体共有が行われた。

問1：それぞれの立場において「インパクト志向である」状態とはどのような状態ですか？

問2：インパクト志向であるために必要なことはなんですか？

【事業者グループ】

①「インパクト志向である」状態とはどのような状態ですか？

・そもそもインパクト志向ではない団体なんてあるのか理解できない（主に企業などの立場の参加者からの疑問）

→NPO はしばしば正義 vs 正義になってしまい、実施・評価の視点が抜けがち。言い訳太郎・こじつけ花子になりがちである

→POCA を回している状態

②インパクト志向であるために必要なことはなんですか？

- ・介入の正しさを問い続ける、「心の余裕」
- ・数字（出てきたものが、しばしば嘘っぽく聞こえる）
- ・「何がインパクトか」についての理解、事業目標
- ・事業価値 vs 社会価値（特に社会価値の見える化）
- ・インパクトは長期で出てくるので、3-5年
- ・長期インパクトが測れる経営陣のコミットメント

【資金提供者グループ】

①「インパクト志向である」状態とはどのような状態ですか？

・今の社会の延長では希望がなく、価値観、しくみ、ライフスタイルの変化、変革が必要だという認識、またSDGsや総合戦略のように将来のゴールの共有がされている状態

- ・受益者視点になっている状態
- ・社会的ニーズをしっかりと把握している状態
- ・資金提供者が、支援先と一緒にインパクトを求めている状態
- ・効果が最大限に出せるという状態

②インパクト志向であるために必要なことはなんですか？

- ・日本や地域のビジョンの策定・共有（持続可能な社会とは？）
 - マルチステークホルダーのプラットフォーム、協働
 - 地域では翻訳が必要

- ・リーダーシップ：行政や企業の中で変革を起こす人を増やす
- ・レスポンシビリティ：資金提供先にあたえるインパクトも大事
 - 申請書に書いた目標について支援先と合意し、報告してもらう。資金提供者も報告書を出す。場合によっては、インパクトに応じて資金を増やしたり減らしたりする。資金提供条件に反映する
 - 今の段階では、100% 求めるより1歩1歩進める必要がある
 - 資金提供者と提供先の間対話が重要

【中間支援グループ】

- 団体支援者として：「団体の」ビジョン達成にたどりつくプロセスと指標の見える化の支援
 - ビジョンオリエンテッドである「追いかけたくなる」指標
 - ロジックモデルを立てただけではない継続的な運用
 - ノウハウとしてのスケールアウト
 - 東京と地方の情報ギャップを埋める
- リソースとの媒介者として：信頼性・確実性が向上してステークホルダーからの支援（寄付者・助成財団・休眠預金）が受けやすくなるツールとして
- 事業・運動の媒介者として：マルチステークホルダー（企業・行政・NPO など）の間で共通のインパクトを形成する
 - ①「地域の」課題解決に対するインパクト志向
 - ②コレクティブ志向が強くなるのが中間支援組織
 - マルチステークホルダーとのビジョン共有と合意形成
- その他
 - ・「評価者」との距離をいかに埋めていくか→本来のコレクティブインパクトの達成のために
 - ・地方行政や地域の中間支援組織ももっと巻き込んでやっていくべき議論かもしれない

以上